

第2回市史講座ミニレポート：平成28年5月14日（土）

シンポジウム「新しい松江の中世史像」

講師：井上寛司先生（島根大学名誉教授）・長谷川博史先生（島根大学教授）・原慶三先生（県立高校教諭）

今回の講座は、平成28年3月に刊行された『松江市史』通史編2「中世」執筆者によるシンポジウムとして開催しました。

まず井上寛司先生から、今回のシンポジウム開催の趣旨として、通史編「中世」の特徴、記述の背景、そして新事実など、本を読む手草となる話を執筆者が行うことで多くの人に読んでもらいたい、との説明がありました。

そして、今回の通史編「中世」の執筆者は各時代・分野の専門的研究者として全国的に活躍し、高い評価を得ている研究者であり、さらに島根県や松江市出身ないし、そこに居住するなど、地域の状況をよく理解している人物によって執筆されたものである事、内容も全国的・世界的視野に立って、中世出雲国や松江市域の歴史的・構造的な特徴と歴史的経緯が総括、論述されていると全体的な解説をされました。

そして各章の説明として、第一章・第三章では政治史的な流れ、第二章・第四章では中世社会のソフト面が記述され、第五章では中世の宗教・文学・美術について取り上げられている、と説明されました。そして各章の編集責任の先生から各章の説明が行われました。シンポジウムにご参加頂けなかった西田先生の第一章、川岡先生の第三章については、井上先生から要点を説明して頂きました。

〔第一章〕西田友広先生（井上先生による解説）

平安時代の末、院政の始まりから鎌倉時代末の政治史的な流れについて、松江市域が述べられています。出雲国は、京都の朝廷側と新興の武家政権にとっても重要な地域であったこと、松江市域にあった国府地域が守護の拠点の変化により相対的に低下し、国府府中域から現在の松江城下へ移動する端緒となった経緯が記述されているとの趣旨でした。特にこの章では中央政治下での地方の動向が日本史的視野で論じられた、ダイナミックな章となっています。

〔第二章〕 原慶三先生

原先生は「中世社会の構造」についてお話をされました。この章では、分かりづらく研究も進んでいない出雲国内・松江市域の荘園と公領について、原先生の地道な調査と研究によってまとめられた成果が発表されました。松江市の地図を駆使し、残存する史料と歴史地理的な形で景観復元から荘園・公領の位置を特定し、新たな広がりを示すと話をされました。

〔第三章〕 川岡勉先生（井上先生による解説）

鎌倉時代末、南北朝期から室町時代・戦国時代末にいたる出雲国の政治状況が取り上げられています。従来、尼子氏を中心に論じられることが多かったのに対し、室町時代の守護山名氏・京極氏の活動や、尼子氏滅亡後の毛利氏による出雲支配の状況についても総合的に論述された、画期的な章であると説明されました。

〔第四章〕 長谷川博史先生

この章では中世社会のソフト面について取り上げられました。中世の水域を中心にした松江地域の景観復元を初めて試みられ判明した成果をもとに、中世末期の松江市域の図を提示されました。さらに史料編で収録された史料・文書を駆使し、そこから見えた松江市域は中世に活発になった日本海水運・内水面交通の拠点地として、末次・白潟地域とともに職人が活動し、物資が行き交い、自治組織も機能した町場であったとお話になりました。

〔第五章〕 井上寛司先生

井上先生からは中世松江市域の宗教の歴史的特徴として、出雲国一宮杵築大社の前進基地とされる神魂神社、出雲国総社の所在地、戦国期には出雲国の二宮と称された佐陀神社、さらに一国一寺の安国寺や、消失した国分寺に代わって国府域の寺院として機能した平浜八幡宮等が集中しており、出雲国の宗教センターとして機能していたと述べられました。

最後に、このたび刊行された『松江市史』通史編2「中世」は、これからの松江市域の歴史を学んでいく上での前提となる成果になる、と強調されました。

さらに会場から質問がありました。

一つは五章で井上先生が話された神道についての質問でした。

神道（シントウ）は古代から日本にあると思っていたが、中世・戦国期にできたとはどのようなことか、という問いでした。これについて井上先生は、「神道」と書いたジンドウ、神祇道（ジンギドウ）は古代からあったかもしれないが、体系化された神道（シントウ）成立は戦国期になって思想体系的にまとめられた仏教の刺激を受けて成立した、と回答されました。ポルトガル宣教師の報告書の記載にジンギドウからシントウとなる記述変化が見られるなど説明されました。

さらに、水上交通によって活発化したというが、経済的地盤としては何があったのか、との質問に、長谷川先生が答えられました。この地域では鉄が多いなどの理由が考えられるが、現在判明していることは、一つの物でなく生業全般の物のやりとりを可能とする機能をもった流通・交通の要地であったと考えられ、石見銀山を背景にした銀の輸出港などといった地ではなかったと思う、と回答されました。

今回のシンポジウムは、従来の中世出雲国・松江地域の認識を新たにする新事実や解説をお話いただき、大変興味深いもので、熱心な受講者とともに盛会で終了しました。